エピリード フリーラン　高野俊彦

改札の長い緊張を抜けると成田駅であった。ホームに、何やら大きく重そうな袋が2つ置いてあった。

「やった～」

150円の切符を持った（西口は、70円）僕たちは、ホームにあった輸行袋をかつぎあげ、さっと電車に乗ってしまった。

事の始まりは、こうである。その日の朝、僕と西口は房総半島先端の館山駅で自転車を組んでいたのでした。そして、海沿いの道を、話しをしながら、あるいは、カニとたわむれ、海に落ちて、ゆっくりサイクリングを満喫していたのでした。やがて、お日さまが少し西に傾きかけたとき…

「おい、たーるいなぁ～。何km走ったんだ？」

「えーと、このあたりだよな」

「なに！まだここかよ、じゃあ、30kmぐらいじゃないか。」

「がびーン。もう100kmは、走ったと思ったぜ～」

「そっそ～だよなぁ。」

「じゃあ、とてもあすじゅうに、銚子になんて行けないじゃん。」　「無理、無理。」

「早く蛇波に行きてえなぁ～」
「お～、行きたい、行きたい。」
「じゃあ、輪行しちまおうぜ。」
「まあ、いいけどね。」
というようなわけで、その日の夕方には、自転車を分解し始めていたのでした。館山駅から、2つ先のその駅は、いなかの古びた無人駅だったので、切符を買えずに電車に乗ることになったのでした。そして、成田駅まで、そのまま乗ってきた僕たちは、輪行袋をホームにおいてホームから、外に、とび出たのでした。
そして、再び成田から、2つ先のいなかの駅でおりた僕たちは、人のよさそうな駅長さんにお願いして、待合室で、泊めてもらうことになったのでした。
夜空にきらめく数えきれない程の星、そして虫の音。
僕は、こらえきれない調子で

「おい、やろうぜ～」
「あっ、オレもだ、よしやろう、やろう」
2人の影は、暗やみへと、消えて行ったのでした。

次の朝、4時半に、1番列車がけたたましい音で通過したときには、大きな荷物をかついだ行商

のおばちゃんたちが待合室にはいってきたのでした。

第2部「波波は、広かった」

畑の中をどれだけ走ったのでしょう。突然、一大未来都市が、目の前にうかび上がりました。

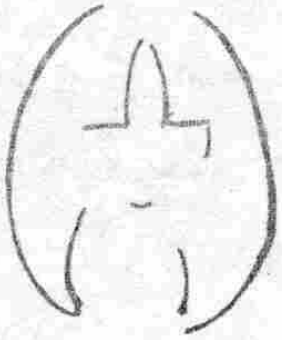
「おい どうやら ここは、大学の中らしいぜ。」

「そうかな ～」

「どうも、人がいないな ～」

「どこが本館なんだ？」

「あ！ あの子に、きいてみよう。」



Melle

「よし」

「あ～ 消えちゃった」

そんなことをしているうちに、ようやく大学の中心らしいところにたどりつきました。かっこいい建物、ロマンス坂など問題にならない程、雰囲気のよい散歩道そして女の子。とにかく最高の楽園でした。

「おい、大学の中にパブがあるぜ！」

「あっ ホントだ。ホントだ。」

そして ....

「あっ 純子ちゃんだ。おーい おーい、純子ちゃんじゃないか？」

「えっ ちょっと待て、え～？、.... タカシくん？」

「うん」
「え…。どうして…こんなところにいるの!?これから、英語なのよ。夜、遊びに来てネ。」
「うん。絶対行くよ。」
向こうから、自転車にのってやってきたのは、中学の時、同じクラブだった純子ちゃんなのでした。
その夜、生まれて初めてはいったきらびやかな女子寮に、ぼくと西口は、すっかり酔いしれて、トランプに熱中しているうちに、いつしか時計は、夜中の3時をさしていたのでした。・・・・・・・・・・・
フカフカのベット、新しいシーツ。筑波の寮は、すべての点でめぐまれ満足のいくものでした。
筑波ですごした4日間は、矢のように過ぎ去りました。その間、いろんな人と出会いました。大学のまわりでやっと見つけた赤ちょうちんのおばさん。以前、石川台に住んでいたのに、東工大を知りませんでした。そして、麻雀をやった仲間たち。いっしょに走ったサイクリング部の女の子。そしてそして・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
サイクリングの楽しさは、走りぬける町、訪れる町の雰囲気をじかに肌で感じとれるところにあると

思います。カンカン走って、距離や登った標高差のみに気をとられても、おもしろくはないと思います。ゆっくり、景色をみながら、あるいは話をしながら、そしてその土地の人々にあいさつをしながら、旅の気分を味わうのが、最適であると思います。自転車でしか出来ない静かで、のんびり気ままな旅、ねむくなったら、野原に自転車を倒して昼寝をしてしまうようなのどかなサイクリング、そして人との出会い。そんなものを大切にしたいと思っています。

◦ 最近読んでおもしろかった本

「僕って何」

「さっとサヨナラ」

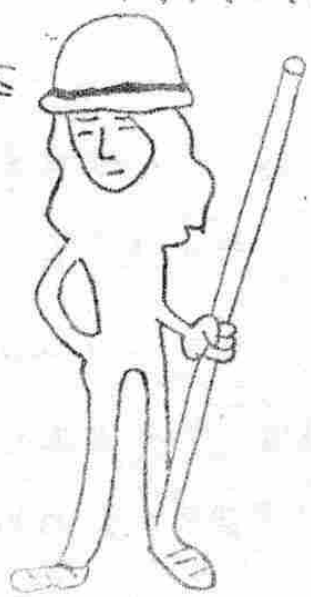
「遠藤周作オろユーモア小説集」

「他人の顔」

◦ 最近読んでつまらなかった本

「雪国」

「エピソード科学史 物理編」

◦ 途中で挫折した本。

「日本の歴史 オ1巻」